

財団(麗澤海外開発協会)設立のねらい



麗澤海外開発協会
初代会長

廣池 千太郎

廣池千太郎 (ひろいけ・せんたろう)

(1922~1989)

財団法人モラロジー研究所(現・公益財団法人モラロジー道德教育財団)第2代所長・廣池千英の長男として東京に生まれる。九州帝国大学法文学部文科哲学科(教育学専攻)を卒業後、東京大学大学院文学部教育学科修了。財団法人モラロジー研究所第3代所長、学校法人廣池学園理事長、麗澤大学学長、麗澤高等学校校長、麗澤瑞浪高等学校校長、財団法人麗澤海外開発協会会長等を歴任。

世界は今や原子力時代に入り、人類社会はますます発展の途上にあります。ところが、やがて21世紀を迎えようとする時にあたって、その繁栄の裏に幾多の深刻な問題が生じてきていることは、識者の等しく憂うところであります。

ことに、世界的な富の不均衡と偏在する過剰人口は、解決困難な諸問題を惹起^{じやつき}しつつあり、とりわけ開発途上国においては、それが国民経済を圧迫し、貧困をもたらす大きな要因となっております。

こうした中において、私どもは、つとに世界人類の安心、平和、幸福を念願して、モラロジー(道德科学)を創建し、全世界に向かって精神的改革を呼びかけた学祖廣池千九郎博士*の意志にもとづいて、財団法人モラロジー研究所ならびに学校法人廣池学園を設置し、モラロジーを根幹とする社会教育、学校教育を広く展開し、微力ながら今日まで、国家ならびに世界の平和をめざして努力してまいりました。

しかし今日、深刻な政治的・経済的諸問題と取り組む開発途上国の姿を見るとき、今やそれらの諸国に対して愛の手を差し伸べることは、幸福と繁栄を享受しているわが国日本の果たすべき当然の義務というべきでありましょう。

もちろん、これら諸国の真の復興は決し



*廣池 千九郎 (ひろいけ・ちくろう)

1866~1938

大分県中津市に生まれる。青年期に教育者として初等教育の普及に取り組み、未就学児童のための夜間学校の開設や、道徳教育の充実を目的とした『新編小学修身用書』の発行、日本初の教員互助会の設立などにも尽力。さらに地方史の先駆けとなる『中津歴史』を執筆、のちに『古事類苑』（日本最大の百科史料事典）の編纂に携わる（全体の4分の1以上を担当）とともに、『東洋法制史』という新しい学問分野を開拓、大正元年に独学で法学博士号を取得した。さらに、人間性・道徳性の科学的・実証的な研究を深め、大正15年に『道徳科学の論文』を完成させ、総合人間学モラロジーを創建。昭和の初め頃より「三方よし」の教えを説く。昭和10年、千葉県柏市に道徳科学専攻塾を開設し、モラロジーに基づく社会教育と学校教育を共に行う生涯教育をスタートさせた。現在、社会教育は公益財団法人モラロジー道徳教育財団、学校教育は麗澤各校（大学・高校・中学・幼稚園）を有する学校法人廣池学園へと受け継がれている。

育は公益財団法人モラロジー道徳教育財団、学校教育は麗澤各校（大学・高校・中学・幼稚園）を有する学校法人廣池学園へと受け継がれている。

て一朝にしてなりうるものではなく、また物量の多少によってもたらされるものではありません。それは、真の人類愛の精神を体得した人々の献身的努力によるのみ可能であると確信しております。

私どもは、そういう考え方を基本にして、本来の目的である精神の改革とともに、さらに具体的な救済策をもって、これらの開発途上国同朋の向上に尽力することを決意したのであります。そこで、私どもが最初に手がけたのが、ラオス王国ビエンチャンの農場建設であります。これは、昭和39年頃から現地調査ならびに農場視察をすすめるかたわら、逐次、数名の技術指導員と資材を送って、ラオス人カンバイ・ピラパンデ氏の所有する農場（100ヘクタール）の桑園造成に着手、以来今日まで、精神面・技術面において着実に実績をあげ、現地の人はもとよりわが国の政財界の各位からも賞賛を受けるに至りました。

ことに、前海外経済協力基金総裁・柳田誠二郎氏、アジア会館会長・岩田喜雄氏などは、その成果を高く評価され、財団設立の必要性を提起されました。

また国立教育研究所所長・平塚益徳氏も現地農場を訪問され、この種の努力こそ実物教育として開発途上国を自力で立ち上がらせる原動力である、と報告されています。

こうした各界の方々の理解あるご助言・ご協力によって、私どもはこの事業をさらに一段と強力に推進することこそ両法人の目的である世界平和と人類の幸福実現への道であるとの確信を得るとともに、今後は、組織的・計画的な施策にもとづいて、特に開発途上国の産業の開発に寄与すべく、ここに財団（麗澤海外開発協会）を設立するに至った次第であります。

なにとぞ、心ある識者におかれましては、私どもの真意をご賢察くださいます、今後とも絶大なご協力を賜りますよう、厚くお願い申し上げます。（1971年記）